

Te-Whariki を導入する認定こども園で働く保育者の意識の変容について

人間文化研究科人間科学専攻 51118001 櫛田英代

本研究は、ニュージーランドの統一教育・保育カリキュラム Te-Whariki を日本で意識し取り入れる保育施設での現状と、実際に Te-Whariki を取り入れることによって保育者の保育に対する意識の変容について明らかにすることを目的とした論文である。また、保育に対する意識の変容によって「子ども観の変化」や「子どもの見方」にどのくらいの育ちや変化があるかについてまとめたものである。

本論文について、第1章では改定後の Te-Whariki について、4原則と、5領域の内容を Infant 期・Toddler 期・Young Children 期の3つの時期に分けて整理し、内容について学びの成果を達成するために必要な保育者の援助やサポートについて、ニュージーランドの幼児教育・保育の特徴について、内容の理解と整理を行った。

第2章では、保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育保育要領の5領域（健康／言葉／表現／環境／人間関係）と幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を中心に内容の理解と整理を行った。

第3章では、第1, 2章で整理した Te-Whariki と3指針・要領の5領域と10の姿の内容を踏まえ、以下の6点よりどのような点において相違があるかをまとめた。幼児教育・保育のフィールドに関しては、ニュージーランドでは、保育施設での生活だけでなく、社会で生活していくことを踏まえたうえでの、保育が展開されていた。一方、日本では、園生活や園児という言葉から、園での生活を基準とした保育が展開されていた。集団と個に対するアプローチの違いに関しては、ニュージーランドでは、子ども一人ひとりの学びを大切に、生まれ持った素質や能力を伸ばすことにフォーカスした保育が展開されていた。一方、日本では、集団での生活を学びながら、子どもの個性を尊重した主体的な保育展開に力を入れていた。援助に対する違いについては、ニュージーランドでは、子どもは有能な学び手であるということ踏まえたうえで関わっている点や、知識やスキルを得ていくために、子ども自身が自分の持つ力を認識し、さまざまなことに取り組む姿勢が大切であるという考えから、直接的に援助をすることは少なく、保育者自身も共に学ぶということを大切にしていた。一方、日本では、保育者は子どもの発達をサポートする存在であると認識している点から、子どもを見守るだけでなく、援助についても保育者の重要な役割の一つであると捉えていた。発達に関する違いについては、ニュージーランドでは、3つの年齢期に6ヵ月の重なりを設けていることから、示された年齢にこだわることなく子どもの発達や成長を見守ることが可能となっていた。一方、日本では、以前の3指針・要領で細かな年齢区分がされていたが、2018年の改定（訂）により、年齢区分が大

大きく変更されたことで、発達や成長を長期的に捉えるようになった。観察の視点については、ニュージーランドでは、できるようになったことはもちろんではあるが、挑戦する姿や、取り組んでいる過程なども学びの視点として観察していることがわかる。観察の記録としては、ラーニングストーリーが用いられ、日常のあらゆる場面における学びの観察が記録されていた。一方、日本ではできるようになったことを中心に、5領域や10の姿などの方向目標を参考に観察していた。保幼少の接続について、ニュージーランドでは5要素を中心とする、小学校で展開される教科との接続が細かく記されており、どの部分がどの教科と結びついていくのかが明確に示されていた。一方、日本では、方向目標を示す10の姿と、小学校で展開される教科の結びつきに関しては、10項目についてどの教科につながっていくかという関係の有無を表にて示しており、方向目標を示したことによって、スムーズな連携が可能になるということわかった。以上の6点が、両国の相違点についての考察である。

第4章では、実際に Te-Whariki を意識する保育施設での現状として、導入から実践に至るまでの経緯や、子ども園での実際の取り組みや研修内容等に触れるとともに、アンケートやインタビュー結果から、保育者の保育に対する意識の変容の有無についてまとめた。

実際に Te-Whariki を導入する子ども園では、子どもの学びにとって最も重要である点を取捨選択しながら、実践に反映することで、保育者の子どもや保育に対する意識の変容が見られたということが言えよう。また、保育者の経験年数によって、意識の変容の振れ幅が大きいことが明らかになった。

本研究において、Te-Whariki を導入する保育施設がまだ少ないため、今後の課題については、これから先、日本の保育現場に Te-Whariki をはじめとする、諸外国のカリキュラム等を広く取り入れていく場合には、以下の3つの課題を解決していかなければならないと考える。一つは、取り入れたいと考えるカリキュラムや、方針についての詳細を理解することについてである。二つ目には、どのような点が目の前の子どもたちに効果的であるかを見極める必要があるという点である。三つ目には、Te-Whariki をはじめとする、諸外国のカリキュラムを導入した際に、取り入れ方や実践内容を踏まえ、保育者にどのような点で有用であったかという点についてである。

これらの課題を踏まえ、今後の研究活動においては、カリキュラム等を導入・実践するにあたり、どのような点が保育者の意識の変化の要因になるかを明らかにすることによって、保育に対する「質の向上」につなげたいと考える。